

Title	Relation between social functioning and neurocognitive test results using the Optional Thinking Test in schizophrenia
Sub Title	統合失調症における社会機能とOptional Thinking Testを用いた認知機能検査結果の関係性について
Author	茅野, 分(Chino, Bun)
Publisher	慶應医学会
Publication year	2006
Jtitle	慶應医学 (Journal of the Keio Medical Society). Vol.83, No.2 (2006. 6) ,p.9-
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	号外
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069296-20060602-0009">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069296-20060602-0009</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# Relation between social functioning and neurocognitive test results using the Optional Thinking Test in schizophrenia

(統合失調症における社会機能とOptional Thinking Testを用いた認知機能検査結果の関係性について)

茅野 分

## 内容の要旨

統合失調症の研究において、認知機能に関する知見は多いが、社会的認知に関する知見は少ない。社会的認知の中で問題解決能力は社会機能を発揮する上で重要な能力である。そこで本研究では、問題解決能力の処理技能における代替思考に焦点を当て、認知機能と社会機能との関係性を検討した。代替思考は拡散思考の一つと考えられ、回答が限定しない問題により測定する。我々は拡散思考の階層構造を調べるために、Letter Fluency Test (Letter FT), Category Fluency Test (Category FT), Optional Thinking Test (OTT) を施行した。OTTは、現実的な生活問題における代替案の測定尺度で、これまでに統合失調症の患者に用いられたことはない。

統合失調症患者36名と健常対照者25名に、Letter FT, Category FT, OTT を施行し、更に認知機能の評価として Mini-Mental State Examination (MMSE), Rey Auditory Verbal Learning Test (RAVLT), Letter Cancellation Test (LCT), 精神症状の評価として Positive and Negative Syndrome Scale (PANSS), 社会機能の評価として Global Assessment of Functioning (GAF), Social Functioning Scale (SFS), Life Assessment Scale for the Mentally Ill-Interpersonal Relations (LASMI-I) を施行し、結果を両群間で比較検討した。

統合失調症患者群は健常対照者群に比較して MMSE, RAVLT, LCT (時間), Fluency Tests, OTT の得点が明らかに低値であった。また OTT の統合方略は LCT (正答数) と相関した。OTTの回答を定性的に問題解決の方略別に分類したところ、両群において各方略の割合に差異は認められなかった。すなわち統合失調症患者群の回答は、健常対照者群と比較して問題解決の方略に定性的な差異はないものの、定量的には有意に少なかった。

OTTの得点は GAF, SFS, LASMI-I などの社会機能の評価とは相関しなかった。OTTで評価される代替思考は社会機能に反映するものではなく、要索的な認知機能との関係が認められた。先行研究において、処理技能のうち方法・目的思考を評価する MEPS (Means-Ends Problem-Solving) の得点が社会機能と相関していた結果とは対照的であった。今後は更に統合失調症の問題解決能力を精査し、社会機能を回復するための手段を考える必要性が示唆された。

## 論文審査の要旨

本研究では、統合失調症の問題解決能力における代替思考へ焦点が当たられ、認知機能と社会機能の関係性が検討された。代替思考は知能における拡散思考の一つで、答えが限定されない問題により測定される。現実的な生活問題における代替の解決方略を測定する尺度に Optional Thinking Test (OTT) がある。本研究では、統合失調症36名と健常対照者25名にOTT、認知機能の評価として全般的知能、記憶、注意、各種 Fluency に関する検査、精神症状の評価として PANSS、社会機能の評価として GAF, SFS, LASMI-I の各スケールが施行された。統合失調症群は健常対照群に比較して全般的知能、記憶、注意、各種 Fluency に関する検査、OTTが低値であった。統合失調症群のOTTは GAF, SFS, LASMI-I などの社会機能と相関せず、Fluency Tests などの認知機能と相関し、さらに統合方略は注意検査 (正答数) と相関していた。問題解決の方略の割合に差異は認められなかった。すなわち、統合失調症群の回答は健常対照群と比較し、問題解決の方略に定性的な差異はないものの、定量的には有意に少なかった。

審査ではまず対象として、統合失調症群が若年、軽症例であることが問題とされた。これには、検査の性質上、研究に同意して検査が可能な対象として、老年、重症例は不適当であり、長期間の罹病や服薬の影響を受けていない者となったと回答された。しかし統合失調症の全体像を考慮した場合、状況が許す範囲で、今後、対象を拡大し比較、検討することも必要であると指摘された。また健常対照群について、特に認知機能と OTT との相関も検討すべきとの指摘がなされた。今回は先行研究を踏まえ、まずは健常対照群と統合失調症群との差異についてのみ注目したが、今後は健常対照群に加え、他の精神疾患群との比較も行いたいと回答された。次に OTT の評価方法として、消極的方略が不適切な回答として除外されたことについて、統合失調症群ではこの方略を用いる場合が少なくないと思われ、これが結果にも影響を及ぼしたのではないかとの質問がなされた。これには本来の課題設定が消極的方略を認めるものではなく、実際に方略数としても多くはなかったことが回答された。しかし今後は、全回答を考慮の上、除外された回答についても検討を加えることが、統合失調症の思考や行動の特徴をより明らかにするためには有用であるとの示唆があった。統計については、対象や結果の一部、評価者間信頼性などについて今回と異なった方法が提案され、今後の課題として指摘された。結果に関し、年齢や罹病期間、神経遮断薬量、さらに病気の種類や重症度などについても検討すべきとの意見が述べられ、統計的手法による OTT の質的な解析も行うべきとの提案がなされた。

以上、本研究は幾つかの検討すべき課題を残しているが、統合失調症の問題解決能力における代替思考に焦点を当て、認知機能と社会機能の関係性について確認し、今後の治療的介入に有益な示唆を与える点で、臨床的価値ある研究と評価された。

論文審査担当者 主査 精神神経科学 鹿島 晴雄  
内科学 鈴木 則宏 外科学 河瀬 城  
衛生学公衆衛生学 大前 和幸  
学力確認担当者：  
審査委員長：鈴木 則宏

試問日：平成17年12月27日